

税金で守られている私たち

旭川市立神居東中学校 2年 佐久間 安里

目が覚めたら病院にいた。泣きながら注射を打たれ、右手には点滴がつながれている。これが私の人生の中で一番古い記憶。四歳のときに幼稚園で倒れて救急車で運ばれたときのことだ。これが三度目だった。二歳のときは入浴中、三歳のときは家で姉と遊んでいるときに突然倒れ、救急車で運ばれたらしい。最初はなぜ倒れたのか原因不明だったが、病院で検査を重ねていくうちに、熱性けいれんだということがわかった。多くの場合は高熱がでてからけいれんをおこすが、私の場合は前ぶれなくけいれんをおこし、その後徐々に熱が上がってくるタイプだったらしい。退院してからも通院したり、いざというときの薬を処方してもらっていたが、それ以来救急車のお世話になることなく、今も元気に過ごしている。

中学一年生のある日、体調不良で病院へ行き、会計時にお金がかからないことを不思議に思い調べると、子ども医療費助成という制度があり、その財源は税金だということがわかった。そして、私を三度も救ってくれた救急車や、倒れた原因究明のために沢山の検査をしてくれた病院の治療費も税金によってまかなわれていた。税金という言葉はよく耳にするが、あまり身近に感じていなかつた。しかし、この受診をきっかけに税金について深く知りたいと思うようになった。

私たちは医療、教育、公共施設、警察、年金、災害対策や復旧など税金によって安心や安全、学びを得ている。だが、もしも日本から税金がなくなるとどうなるのだろうか。私がお世話になった救急車を呼ぶことにお金がかかったり、病院は全額自己負担になってしまったり、私たちに無償で配布されている教科書もお金がかかり、貧富の差が大きな壁になり、医療や教育を受けることができる人が偏ってしまう。さらに道路が整備されなかつたり、公共施設が修繕されなくなったり、警察を呼ぶのにもお金がかかり、犯罪が増え、治安が悪くなり、安全がおびやかされてしまうかもしれない。その結果、多くの人が過ごしにくい社会になってしまふと思う。政治に関するニュースで「税金をなくせ」という声を聞いたことがあるが、本当にそれでいいのだろうか。私は、税金によって守られているこの社会でこれからも暮らしていきたい。

最後に救急車のお世話になってから十年の月日が流れたが、今でも救急車や当時お世話になった病院を見るたびに、助けてくれてありがとう感謝の気持ちで胸がいっぱいになる。今はまだ中学生なのでできることは多くはないかもしれないが、将来納税の義務をしっかりと果たし、税金によって私たちが受けている恩恵を未来の子どもたちにつなげていきたい。